

第4回 被災地訪問プロジェクト報告

5A N. F

今回のプロジェクトは、私にとって2回目の参加でした。前回の参加では、メディアで見ていたような、流されたままの船や家屋が残っているイメージを持っていたのですが、辺り一面更地だったことにとっても衝撃を受けました。

そして、今回の参加では初めて気仙沼方面にも訪れ、南三陸町内の様子とは大きく異なり、新たな衝撃をうけました。南三陸町は多くの重機やトラックが行き来していて、まるで工事現場のような状態でしたが、対して気仙沼はまだ解体されていない家屋が残っている状態でした。前回は、がれきが片付いている町の様子を見て、表面的な捉え方しかできなかつたために「復興している。」と感じました。しかし今回は、現地の人に防潮堤の高さや高台移転など復興に向かう現状と、その課題などを聞き「復興するにはまだ時間がかかる。」と感じました。

正直、前回の参加は、私にとって町の様子や現地の人々の明るさに衝撃を受けることばかりで、きちんと吸収できませんでした。また、現地の人に直接震災の事を聞いてもいいのだろうかと思いついた為、詳しく被災地の現状を聞けませんでした。そして、帰ってから「私は何をしに被災地に行ったのだろうか。いったい何ができたのだろうか。」という後悔の気持ちになりました。

今回の参加が決まるまでは正直「私が行ってもいいのだろうか。」との迷いがありました。それは、今回は特に参加希望者が多かったことと、2回目となる私が行くよりも、まったく行った事のない人が参加するべきではないかと思ったからです。そして、1人でも多くの方が被災地の現状を見て伝えることが今私たちにできる事で、そのことこそが、復興につながると考えたからです。しかし、前回果たせなかった被災直後や被災地の現状を直接、現地の人に聞き、きちんと吸収したいと強く考え、私は参加することに決めました。そして、2回目だからこそ、前回とは違う感じ方があるのではないかと考え続けました。

今回再び被災地を訪れて、改めてよかったと思いました。それは、被災地の現状を自分の目で再び見ることができ、また、2日目の作業や交流会で仮設住宅での暮らしの様子などを聞くことができたからです。そして何よりも、町の様子がゆっくりとですが前進している事や現地の人々のより前向きな意識の変化など、被災地が変化している事に気づくことができたからです。このことは、2回目の参加だからこそ感じる事ができた点でした。

先日、父に「ボランティアとして被災地に行くことが、現地の人にとって邪魔な存在になっていないか」と聞かれました。その時の私は、父の意見に反発しました。しかし、父の意見も一理あると思います。ボランティアとして現地に行くにはできることの制限があり、私たちはその制限の中でしか活動することができません。狭い枠の中でしか動くことのできない私たちには、やれることが限られています。もしかすると、父の意見のように現地の人の中には、ボランティアが来ることに対して、よく思

っていない人もいるかもしれません。しかし、私たちはその中で自分のできる事をすべきだと思います。私たちは学生です。有志参加とはいえ、今このように被災地の事について皆さんに伝える機会が与えられています。だからこそ、十分な活動が出来なくても、見てきたからには発信源であるべきだと思います。震災から3年が経ち、震災の記憶が色あせようとしている今、私は変化している被災地を見て驚き、復興の道のりの長さに愕然としました。そして、反対に現地の人々の明るさに勇気をもらい、意識の高さに驚かされました。

参加について最初は迷いがあったものの、何度も参加することで、町の様子や現地の人々の前向きな意識の変化を知る事ができ、また自分の考えも変化していることに気が付きました。そして、何度も行くからこそ意味があるということにも気が付きました。今回の参加では前回気づくことのできなかつた、3年経ったからこそ見えてきた防潮堤の建設や復興の遅れなど、被災地に残る多くの問題を知ることができました。

現地に行くからこそ感じる事、何回も行くからこそ見られる変化の様子。このプロジェクトでは知る事がたくさんあります。だからこそ、行く意志のある人が参加し続けたいと思います。同じ場所に行っても考え方や捉え方は様々です。だからこそ、私はこれからもこのプロジェクトに参加していきたいと思いました。